



エモい。

February - March 2023

こんな本



読んでみて

take free No. 99

三重短期大学
附属図書館



目次

エモい。	1
Book design の世界 vol.29	8
ちょこちょこ日記 #39	12



エモい。

この言葉を見聞きするようになってしばらく経ちます。見慣れた気もするけれど、まだ新しい言葉という印象もあります。

ところで、そもそも、「エモい」って何？ そう思った私は、図書館にある本で調べてみました。新しい言葉なので、現代用語集の『現代用語の基礎知識2023』（自由国民社／2023年）を見

ます。表紙に藤井風さんの似顔絵が載ってて、もうすでにエモい

なのですが。【時代・流行 | 若者】の項目に「エモい」ありました！
[エモい「emotional=感情的になっている」から。「ヤバい」を超える感動や感激を表す。]と書いてあります。



そうか。エモいのエモはemotionalから来てるんですね。…エモいって言葉、わかったようなわからないような。

エモい映画、エモい写真、エモい音楽…エモいと言われるものはたくさんあるけれど、どうしてエモいって思うんだろう。今回は、エモい本を集めて、その本の何がエモいのかを考えてみようと思います。そうすれば少しは「エモい」という言葉が見えてくるかもしれません。さて、前置きが長くなりましたが、【エモい本特集】をはじめます。

青春のきらめき。

恋の始まりは、いつだってエモい。

『ボクたちはみんな大人になれなかった』

燃え殻 著／新潮社／2017年／913.6||Mo 14

エモい本を考えた時に一番初めに思い浮かんだのがこの本でした。昔の彼女の記憶と現実を生きる主人公の姿を描いたストーリー。出会いと恋の始まりがエモい。振り返るからこそ輝いて見えるのかもしれませんが。



『桜のような僕の恋人』

宇山佳佑 著／集英社／2017年／913.6||U 98

美容師の美咲と出会ったことから晴人はカメラマンを目指し、やがて恋人同士になりますが、美咲は難病を発症してしまい…。美しさと儚さにエモさを感じずにられません。出会いの力の大きさを感じます。



『劇場』

又吉直樹 著／新潮社／2017年／913.6||Ma 71

大阪から上京し劇団『おろか』を旗揚げした永田と、大学生の沙希の物語。読んでいるうちに不器用な登場人物と自分が重なってみえてきました。東京の街で懸命に生きる姿ってエモい。



そして、喪失には、

どうしたって心をかき乱される。

『残像に口紅を』

筒井康隆 著／中央公論社／1995年／913.6||Ts 93

使える「音」が徐々に減っていく実験的長篇小説。音が減り、使える言葉が減っていく中でも、小説として表現していく、そのアイデア自体がエモいです。失われていくことで、かつてそこにあったものの存在が際立って見えます。



『ノルウェイの森』上・下

村上春樹 著／講談社／2004年／913.6||Mu 43||1・2

37歳になった僕は、飛行機で流れてきたビートルズのメロディーに18年前のあの日々を思い出す…。喪失の周りにひたひたと漂う繊細な空気にエモさを感じます。



『きつねのざんげ』

安野光雅 著／岩崎書店／1979年／726.6||A 49

森の中で一番の偽善者になろうとしたキツネの物語。満月に語りかけるキツネの言葉が物悲しく響きます。読むと様々な感情が湧いてくる、静かにエモい絵本です。

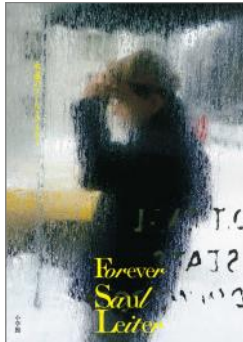


静かで、儂い時間。

エモいはあらゆるところに現れる。

『永遠のソール・ライター』

ソール・ライター 撮影／小学館／2020年／748||L 53
ニューヨークの日常風景のスナップや最愛の人のポートレートが収められた写真集。雨や雪の日、ガラス越しの景色など、日常の中にゆるる淡いひとときが写し出されていてエモいです。



『四月になれば彼女は』

川村元気 著／文藝春秋／2016年／913.6||Ka 95
かつての恋人・ハルから精神科医の藤代へ届いた手紙から始まる12か月の物語。過去と現在を描いたストーリーには切ない気配がして、気付けば愛とか恋とかって何だろうって考えていました。



『ひとりぼっちのかいぶつといしのうさぎ』

クリス・ウォーメル 作・絵／吉上恭太訳／徳間書店／2004年／726.6||W 88
世界で一番みにくいと言われるかいぶつとそのまっすぐな視線とやさしい心。切なさや優しさが心に広がります。絵本だからこそ伝わってくるメッセージがエモいです。



まっすぐ自分に語りかけてくる。

『やりたいことをやるために、
好きなものを好きだと言うために、
僕らは生まれてきたんだ。』

坂爪圭吾 著／KADOKAWA／2020年／159||Sa 38
人気ブログを書籍化したものです。タイトルからしてエモくて、言葉に添えられた写真もエモい。そうだー!って叫びたくなるような青春感。今の自分に必要な言葉が目に飛び込んできます。



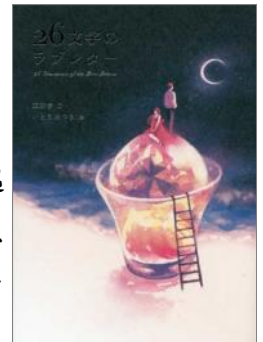
『えーえんとくちから』

笹井宏之 著／筑摩書房／2019年／911.168||Sa 73
こちらは短歌集です。短歌をひとつ読んで、ページの余白で味わって、また一つと読み進めていくと、選び抜かれた言葉の繊細なイメージが心の中で広がっていきます。



『26文字のラブレター』

遊泳舎 編／いとうあつき 絵／遊泳舎／2019年／911.66||I 89
江戸末期～明治にかけて流行した唄「都々逸(どどいつ)」。恋愛にまつわる都々逸がイラストとともに紹介されています。時代を超えて響きあう、鮮やかな余韻はエモい。

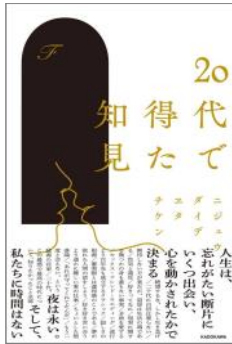


日常こそ、エモい。

『20代で得た知見』

F 著/KADOKAWA/2020年/914.6||F 11

はじめの「ご挨拶」を読んだ瞬間、エモ!となりました。この本で紹介される人生の忘れがたい断片が何ともエモいのです。「たった一つの危険な質問」のページを読んだ時、あまりに的確すぎて、あ...と思ったけど、このままこの特集を進めます…。



『常識のない喫茶店』

僕のマリ 著/柏書房/2021年/914.6||B 63

喫茶店でのお仕事エッセイ。働くって大変だけど、今日も頑張れそうと思える出来事もありますよね。喫茶店での日常がテンポよく書かれていて、引き込まれる一冊です。



『ピースフル権化』

蒼井ブルー 著/KADOKAWA/2018年/913.6||A 52

日記のようにつづられたある男性の物語。何もないと切り捨てないで、毎日の中に秘められた幸せをていねいに掬い取った文章。言葉にできずにこぼれおちていた感情が表現されているものに出会うとエモいって思います。エモさ、ここにあり、そんな一冊です。



懐かしい。行ったことないけど。

『ふるさとの手帖』

かつお(仁科勝介) 著/KADOKAWA/

2020年/291.09||Ka 87

この本は、著者が大学1年生の終わりから日本の全ての1741市町村を一周した旅の記録です。写真がとにかくエモい。行ったことない場所なのに、懐かしい気がしてきます。自分の記憶の中の懐かしい風景と感情がよみがえってきます。



ここまでエモい本を紹介してきました。「泣ける」や「笑える」がそうであるように、きっと「エモい」と感じるものは人それぞれでしょう。タイトルや表紙からエモいが漂っている本、開いてみるとエモさたっぷりの本など、エモさの種類や表現はそれぞれですが、どの本も間違いなく心揺さぶられるものばかりでした。

青春、恋、喪失、儂さ、まっすぐ、日常、懐かしさ...いろいろなところに「エモい」はありました。言葉にできないあらゆる気持ちを伝えたくて、「エモい」という三文字に託しているのかもしれませんが。

「エモい」と「エモい本」を探し求めた日々もこれで終わりです。これからの「エモい」という言葉のゆくえに注目しつつ、【エモい本特集】を終わります。ありがとうございました。

Book design の世界 vol.29 bookwall

本を選ぶ時、表紙や本のデザインに惹かれて選ぶことがあります。本を開くとそこに書いてある「装丁」という言葉と名前。

本のデザインをする方を装丁家やブックデザイナーと言います。この連載では本のデザインや装丁から、本を楽しみたいと思います。

第29回目は、bookwall です。

今回は、bookwallの装丁をご紹介します。代表の松昭教さんが2009年に株式会社ブックウォールを設立されました。bookwallは、書籍の装幀、ブックデザイン、エディトリアルデザインを中心に活動されているデザイン事務所です。話題作の装丁を数多く手掛けられています。



装丁：bookwall
装画：loundraw

一冊目に紹介する『君の臓腑をたべたい』（住野よる著／双葉社／2015年／913.6||Su 63）は、著者の住野よるさんのデビュー作です。loundrawさんによる美しい装画が、印象的なタイトルを優しく包んでいるようです。登場人物の声が聞こえてきそうな装丁です。

住野よるさんの本はこれまでイラストが中心の表紙でしたが、『麦本三歩の好きなもの』（住野よる著／幻冬舎／2019年／913.6||Su 63）では、初めて装丁に写真が使われました。これまでと一味違う作品だと装丁からも感じられます。主人公の麦本三歩役として表紙に登場するのはBiSHのモモコグミカンパニーさん。本を読んだから表紙を眺めるのも楽しいです。



麦本三歩役：モモコグミカンパニー (BiSH)
撮影：外林健太 (RIM)
装丁：bookwall



装画：榎本マリコ
装幀：bookwall

『#塚森裕太がログアウトしたら』（浅原ナオト著／幻冬舎／2020年／913.6||A 82）装画の中に、…や+などの記号が書かれていて、SNSと現実のつながりを感じさせます。青春群像劇であるこの作品の持つ痛みと希望が伝わってくる装丁です。



装画：宮崎夏次系
装丁：bookwall



装幀：bookwall
装画：orie

『死にたがりの君に贈る物語』（綾崎隼著／ポプラ社／2021年／913.6||A 98）は、人気小説家・ミマサカカオリが紡いだ小説『Swallowtail Waltz』をめぐる物語です。涙する女性と紙のようなものが舞っている装画からは、永遠のように静かな一瞬を感じます。この本に込められた思いがぎゅっと濃縮されたような装丁です。

『マイクロスパイ・アンサンブル』

(伊坂幸太郎著／幻冬舎／2022年／913.6|| 68) は、伊坂幸太郎さんが福島の野外フェス「オハラ☆ブレイク」のために書かれた連作短編小説をまとめた作品です。猪苗代湖、磐梯山、フェスの様子が描かれた装画はTOMOVSKYさんよるもので、本文にはTOMOVSKYさんの楽曲がモチーフとして登場します。コラボの魅力がぎゅっと詰まったデザインです。



装幀：bookwall
装画：TOMOVSKY



立体：北原明日香
写真：下村しのぶ
装幀：bookwall

『スモールワールズ』

(一穂ミチ著／講談社／2021年／913.6|| 13) は、6篇からなる連作集です。表紙に使われている、絵の描かれた様々な大きさの木のブロックがテーブルに並んでいる写真からは、光と影、裏と表といったイメージを受けます。タイトルの文字が繋がって書かれ、各作品のタイトル扉にも木のブロックが使われていて、装丁から一つ一つの物語のつながりを感じました。

『死にがいを求めて生きているの』

(朝井リョウ著／中央公論新社／2019年／913.6|| A 83) は、8作家による壮大な文芸競作企画「螺旋プロジェクト」の一作です。インパクトの強いタイトルと、満開の桜の下で楽しそうな子どもの和やかな写真とのギャップに不穏さを感じ、この作品をどう読むかを問われているように感じます。



写真：濱田英明
装幀：bookwall



装丁：bookwall
装画・扉絵：カシワ

『花屋さんが言うことには』

(山本幸久著／ポプラ社／2022年／913.6|| Y 31) 。装画にも扉絵にもお花がいっぱいで、花屋さんのお仕事を描いた作品にぴったりです。見返しには透け感のある軽い用紙が使われ、めくると気持ちが軽くなるようです。さわやかで清々しい装丁です。

『うしろむき夕食店』

(冬森灯著／ポプラ社／2021年／913.6|| F 99) には、見返しにチェック模様が入ったクリーム色の用紙が使われ温かみを感じます。おいしそうな装画に包まれた本書は、わくわくしながらお店に入るような気持ちで本を開くことができる装丁になっています。



装丁：bookwall
装画：イナコ



デザイン・着色：bookwall

最後に『その本は』

(又吉直樹、ヨシタケシンスケ著／ポプラ社／2022年／913.6|| Ma 71) を紹介します。金色の箔押しと花布、赤色のしおり紐が使われ、本文の紙は古びた色合いになっていて、歴史を感じさせる重厚な本のように全体がデザインされています。その本をめぐる物語の中へ入りこむことができ、本を手取って読むことの面白さが感じられるデザインです。

今回ご紹介したbookwallの装丁は、本を手にとってもらうための工夫が、秘密のスパイスのように効いていて、本のイメージがぐっと広がり、本を開く瞬間の空気までもデザインされているように感じました。

参考：bookwallホームページ <http://bookwall.jp/>

Book design の世界 次回もお楽しみに！



ちょこちょこ日記 #39 「エモい。を探して」

今回は「エモい。」をテーマに本をご紹介しました。この特集のためにエモいという言葉のことをずっと考えていました。

家で映画を見る時も、ついついエモい映画を探してしまいます。そして選んだ映画は、菅田将暉さんと有村架純さん主演の「花束みたいな恋をした」(2021年公開／土井裕泰 監督／坂元裕二 脚本)。主人公・麦と絹の5年間の恋を描いた作品です。これはもう本当に素晴らしかったです。嬉しい・楽しい・さみしい・悲しい、あらゆる形容詞がつまった、まさにエモい映画でした。ずっと泣きたくなるほど心が動きっぱなしで、すっかり二人の恋に恋してしまいました。大好きな映画になりました。エモかったです！



「こんな本読んでみて」は次号でNo. 100を迎えます。

【No.100 記念号】として2023年3月発行予定です。



こんな本読んでみて No.99

2023年2月1日 発行

編集・発行 三重短期大学附属図書館

〒514-0112 三重県津市一身田中野157

<http://www.library.tsu-cc.ac.jp/>